

ぼくの映画を見る尺度

— 映画文学人生論

三島由紀夫 (1925-76)

『ぼくの映画を見る尺度』(1980)「潮出版社」

『三島由紀夫映画論集成』(1999)「ワイズ出版」

参考：潮騒 (1954)

脚本：中村真一郎

監督：谷口千吉 (1954)

谷口千吉

出演：久保新治 久保明

宮田初江 青山京子

私がいい映画だと思うのは、首尾一貫した映画である

三島由紀夫は、映画を見る尺度について、「私がいい映画だと思うのは、首尾一貫した映画である」という。「各部分が均質で、主題がよく納得され、均斉美を持ち、その上、力と風格が加われば申し分がない。それは映画以外の芸術作品に対する要請と同じものである」。

具体的にどんな映画がいいか。いろいろあげているなかで、私も観たことがあるのは、「エデンの東」「裏窓」「シェーン」、それに「吉良常と飛車角」「総長賭博」などだ。

「エデンの東」はジェームズ・デイーン主演。二十四歳で夭折した人気俳優だが、「美しい人は若くて死ぬべきだし、そうでない人はできるだけ永生きすべきであろう」。「裏窓」の恐怖の裏側には、人間生活に対する余裕（ゆとり）のあるシニズムが行き瓦（わた）っている。「西部劇に分別くさい役者が出るのはまずい。「シェーン」のアラン・ラッドのように、精悍だが、全然知的な味はひのない役者が適当である」。「吉良常と飛車角」や「総長賭博」の鶴田浩二には「男の我慢の美しさがひらめくのだ。思えば私も、我慢を学び、辛抱を学んだ。そういうと人は笑うだろうが、本当に学んだのである。自分ではまさか自分の我慢を美しいと考えることは困難だから、鶴田のそういう我慢の美しさを見て安心する」。



ぼくの映画を見る尺度

映画文学人生論

これだけの映画評だけでも三島が映画を見る尺度がある程度は伝わってくる。

自作の小説のうち、映画化されたものは十本以上ある。そのうちすぐれているのは市川崑監督の『炎上』、ついで蔵原惟繕監督の『愛の渴き』だというが、いちばんヒットしたのは『潮騒』、原作、脚色、製作、監督、主演がすべて三島由紀夫で話題になったのは『憂国』。

『潮騒』は何度も映画化されており、吉永小百合や山口百恵がヒロインを演じて、青春映画の代表作とみなされているが、三島がロケ地へ撮影見物に出かけたのは、谷口千吉監督の『潮騒』のとき。現実のモデルは神島という小島で、小説にあるとおり、一里四方しかない。はじめ調査に二回行ったが、その土地の人情の醇朴が忘れがたく、ロケ見物を申し出たのも、実はもう一度、神島へ行って見たかったからだといっている。

『憂国』は昭和十一年の二・二六事件の外伝。決起した青年将校たちを叛乱軍として勅命によって討たざるをえない状況に立たされた近衛歩兵一聯隊の中尉が、大義について考えた末、自死を選び、妻もその後を追う。

三島由紀夫が四十五歳のとき自衛隊に決起を呼びかけて、自裁した不可解な行動とその心理を説明する作品となっている。

憂国忌列を乱してゐるは誰ぞ 八田木枯